

思いのこもった一字

新年と言えば書き初め。しかし、今年度は昨年度のようにいきません。コロナの影響で、事前に十分な指導の時間が取れません。昨年度と同様のやり方であれば、掲示するスペースや掲示の仕方にも工夫が必要になります。書き初めと切り離せない「どんど焼き」も中止になった地域が多くあります。

そういう理由から、今年に関しては書き初めをやめようかということも考えました。しかし、今年四月から全面実施される新学習指導要領においても、「伝統や文化に関する教育」の重要性が強調されています。簡単にそれをやめるわけにはいかなないと考え、イレギュラーな形ですが、今年度は「新しい年に思いを表す漢字一文字」「新年初日に学校でしたためる」「半紙ではなく色紙」という方法を取ることにしました。

しかし、法的な根拠に裏付けられたこととしてではなく、新しい年に向けての生徒のピュアな思いを発見できる取り組みとして、書き初めには大きな意味があると私は思います。キーボードやコントローラーの扱いには長けている現代の生徒たちが、緊張して筆を執る時間は非常に尊いものです。そして、一枚の色紙に思いを表出するのであれば、彼らの成長を見守りたいと考える大人にとっては子ども理解の貴重な機会になります。生徒を知るといふ意味で大切なことだと考えました。

一年生の中に、写真の一字をしたためた生徒がいました。音読みは「バク」、訓読みは「さら、す」です。意味は「日にさらして乾かす」「風雨にさらす」。当然、常用漢字ではありません。教科書には載っていませんし、出てきたとしても必ず読み仮名がつく漢字です。書き初めとして、この字が書かれることはまずありません。



ここからは勝手な私の予想です。本来なら、学活に参加して生徒の思いを直に知るとよいのですが、全校生徒三百三十九人ではそれはできません。

恐らくですが、新しい仲間とこれまで生活してきた中で、その生徒は自分がまだまだ出し切れていないと感じていたのではないのでしょうか。そこにはいろいろな事情があったのかもしれない。ありのままの自分を表に出したい、出してそれを受け入れてくれる仲間関係を作りたい、そんな思いから、その生徒は「曝」の字を選んだのだと勝手に想像しました。

ご家族の皆さんにお願いです。本日色紙に書くという心地よい緊張感を味わいながら書いた字をきっかけにして、コミュニケーションを取ってみてください。書き初めとしての出来栄ではなく、思いを共有していただけると、伝統文化にとどまらない大きな価値が出てくると思います。

(一月六日 記)